読書のよろこびを子どもたちに

おすすめ絵本リスト

～集団への読み聞かせ～

茅ヶ崎市立図書館

このリストは、大勢の子どもたちに読み聞かせをしている方へおすすめの絵本です。
読み聞かせ講習会で配布しているブックリストに加筆しました。

絵本を選ぶときは、実際に声に出して読んだり、誰かに読んでもらったりして、絵とお話を十分に味わってみてください。そして、その中で気に入った作品を子どもたちに届けていただきたいと思います。

表の見方

<table>
<tr><td>タイトル</td><td>作者</td><td>出版者、出版年</td></tr>
<tr><td colspan="2" rowspan="2">あらすじや絵本の特徴</td><td>対象年齢</td></tr>
<tr><td>読み聞かせにかかる時間</td></tr>
</table>

※「対象年齢」や「読み聞かせにかかる時間」は目安です。

＜昔　話＞

1	いっすんぼうし	石井桃子／文　あきのふく／絵	福音館書店 １９６５年
	小さないっすんぼうしが、都にのぼって鬼を退治する有名な昔話。 わかりやすい言葉となめらかな文章で語られ、日本画家による美しい挿絵で物語が展開される。春におすすめ。		幼児　４歳～ １１分
2	うさぎのみみはなぜながい	北川民次／文・絵	福音館書店 １９６２年
	「もっと体を大きくしてほしい」と願ううさぎに、神様は「トラ、ワニ、サルを殺して皮を持ってきたら願いを叶えてやろう」と答える。賢いうさぎは全てやってのけるが、神様はうさぎの体全体でなく、耳だけを大きくしてやる。メキシコ民話のなぜなぜ話。		幼児　５歳～ １２分
3	おおかみと七ひきのこやぎ	瀬田貞二／訳　フェリクス・ホフマン／絵	福音館書店 １９６７年
	有名なグリムの昔話。 お母さんやぎの留守中、子やぎたちは悪い狼に丸のみにされてしまう。家に帰ってきたお母さんやぎは、昼寝中の狼を見つけ、そのお腹を切り開くと、中から次々と子やぎが現れる。		幼児　４歳～ ９分
4	おおきなかぶ	アレキセイ・ニコラ・エヴィチ・トルストイ／再話 佐藤忠良／絵　内田莉莎子／訳	福音館書店 １９６２年
	おじいさんがかぶのたねを植えると、とてつもなく大きく甘いかぶができた。そのかぶを抜くには、おじいさん１人では抜けず、おばあさん、まご、いぬやねこ、ねずみまでも手伝いに来る。「うんとこしょ　どっこいしょ」のリズムが楽しく、子どもたちがよく口ずさむ。ロシアの昔話。		幼児　３歳～ ３分
5	おだんごぱん	瀬田貞二／訳　脇田和／絵	福音館書店 １９６６年
	おばあさんが焼いたおだんごぱん。ころころころがり外へ出て行ってしまう。うさぎや狼、くまに食べられそうになってもうまく逃げていくが、きつねにほめられ、いい気になったおだんごぱんは…。 うたや言葉のリズムが楽しい絵本。ロシアの昔話。		幼児　４歳～ ６分
6	かさじぞう	瀬田貞二／再話　赤羽末吉／絵	福音館書店 １９６６年
	大みそか、貧乏なじいさんは年越しのために笠を売りに行く。誰も買ってくれずがっかりして帰る途中、吹雪の中、寒そうに立っているおじぞうさまがいた。売り物の笠と自分の笠をおじぞうさまにかぶせて帰ると、元旦の朝、不思議なことが起こる。絵と言葉の雰囲気を大切にゆったり読み聞かせたい。		幼児　４歳～ ６分
7	かちかちやま	小澤俊夫／再話　赤羽末吉／画	福音館書店 １９８８年
	じいさまが捕まえたたぬきに、ばあさまが殺されてしまう。悲しんで泣いているじいさまのもとに、うさぎがやってきて、「かたきをとってやる」と言う。うさぎは、たぬきの背中にヤケドを負わせ、その背中にとうがらしを塗り、最後は土舟に乗せてたぬきを沈ませてしまう。日本の昔話。		幼児　4歳～ ８分
8	かにむかし	木下順二／文　清水崑／画	岩波書店 １９５９年
	かにがせっせと世話して育てた柿の木には実がいっぱいなった。そこに意地悪なさるがやってきて…。 意地悪なさるへのあだ討ちが何とも面白い「さるかに合戦」の絵本。 あたたかみのある方言で語られ、絵も力強い。大型本（３３ｃｍ×２６ｃｍ）もある。		幼児４･５歳～ １３分
9	金のがちょうのほん	レズリー・ブルック／文・画　瀬田貞二／訳 松瀬七織／訳	福音館書店 １９８０年
	「金のがちょう」「三びきのくま」「三びきのこぶた」「親ゆびトム」の４つの昔話が収録されている。著者はイギリスの画家。挿絵にはユーモアが溢れ、古いイギリスの趣を感じさせる。		幼児　４歳～ ―

10	くわずにょうぼう	稲田和子／再話　赤羽末吉／画	福音館書店 １９７７年
	よくばりの男が「よく働いて、めしを食わないにょうぼう」を見つける。ところが、女房の本当の姿は、頭のてっぺんに大きな口のあるおにばばで…。どきどきするこわい話。		幼児　４歳～ ７分
11	３びきのくま	レフ・ニコラエヴィチ・トルストイ／作 バスネツォフ／絵　おがさわらとよき／訳	福音館書店 １９６２年
	大きいくま、中くらいのくま、小さいくまの住む家に、森で道に迷った女の子が入り込む。スープを飲んだり、ベッドで寝たり…。幼い子に喜ばれるくり返しで話が展開する。ロシアの昔話。		幼児　３歳～ ７分
12	三びきのやぎのがらがらどん	マーシャ・ブラウン／絵　瀬田貞二／訳	福音館書店 １９６５年
	がらがらどんという名の三びきのやぎが、山の草を食べようと出かける。しかし山の途中の橋の下には、おおきな怪物トロルが待ちかまえる。話の展開とその世界観をひきたてる力強い絵が、子どもを強くひきつける。ノルウェーの昔話。		幼児　４歳～ ５分
13	スーホの白い馬	大塚勇三／再話　赤羽末吉／画	福音館書店 １９６７年
	馬頭琴という楽器の由来を伝える民話。羊飼いの少年スーホが大切に育てた白馬が、都の競馬で1等になる。しかし、殿様は約束した褒美もやらずスーホから白馬を取りあげてしまう。その後、白馬は力ずくでスーホのもとに逃げ帰るが、矢に射られた傷がひどく息絶えてしまう。スーホは悲しむが、やがて白馬の骨や皮を使って、楽器を作り出す。		幼児・低学年 ４歳～ １３分
14	だいくとおにろく	松居直／再話　赤羽末吉／画	福音館書店 １９６７年
	流れの速い川に橋を架けるように頼まれた大工は、鬼から「お前の目玉よこしたら、かわって橋を架けてやってもええぞ」と言われる。鬼は橋を完成させ目玉を要求してくる。大工は鬼の名前を当てることができるのか。		幼児　4歳～ 5分
15	つるにょうぼう	矢川澄子／再話　赤羽末吉／画	福音館書店 １９７９年
	１羽の傷ついた鶴を助けた男の家に「女房にしてほしい」と美しい娘が来る。その娘は「決してのぞき見なさいませんよう」と男に約束をさせ、奥の間で美しい織物を織る。『鶴の恩返し』という名で広く知られているお話。画家が７年を費やした雪国の情緒を感じさせる絵と、柔らかくなめらかな言葉で再話された美しい絵本。		幼児　5歳～ ９分
16	てぶくろ	エウゲーニ・ミハイロヴィチ・ラチョフ／絵 内田莉莎子／訳	福音館書店 １９６５年
	冬のある日、おじいさんはてぶくろを森に落としていく。すると、てぶくろの中にねずみが１匹、それに続いて、かえるやうさぎ、森の動物たちが次々とてぶくろの中に入り、中はぎゅうぎゅう。てぶくろがだんだん家のような形になっていくのが面白い。寒い日に心も温まるウクライナの民話。		幼児　３歳～ ５分
17	ねむりひめ	フェリックス・ホフマン／絵　瀬田貞二／訳	福音館書店 １９６３年
	子どものない王さまとお妃のもとに、かえるの予言どおり女の子が生まれる。城では盛大な宴会が開かれ、12人の占い女たちは姫によい運を授けるが、宴会に呼ばれなかった13人目の占い女は姫が15歳になったら死ぬよう呪いをかける。そして姫は、１５歳になると百年の眠りにつくことになった。グリムの昔話。		幼児　4歳～ 12分
18	パンのかけらとちいさなあくま	内田莉莎子／再話　堀内誠一／画	福音館書店 １９９２年
	小さな悪魔は、貧乏なきこりのパンを盗むが、そのことで、大きな悪魔たちからひどく怒られてしまう。小さな悪魔は、きこりへのお詫びに、沼を立派な麦畑にかえた。ところがそこに、意地悪な地主がやってきて、実った麦を全部持っていってしまう。麦畑を無事取り戻すことはできるのか。リトアニアの民話。		幼児　4歳～ 9分

19	ブレーメンのおんがくたい	ハンス・フィッシャー／絵　瀬田貞二／訳	福音館書店 １９６４年
	年とって餌をもらえなくなったろばが、町の音楽隊に雇ってもらおうとブレーメンをめざして出かける。その途中、犬や猫、おんどりに出会い、一緒にブレーメンをめざす。日が暮れる頃、寝床を探していた一行は森の中の一軒家を見つけるが、そこはどろぼうの家だった。グリムの昔話。		幼児　５歳～ １０分
20	マーシャとくま	M. ブラートフ／再話　内田莉莎子／訳 エウゲーニ・ミハイロヴィチ・ラチョフ／絵	福音館書店 １９６３年
	友達と森へ遊びに行ったマーシャは、友達とはぐれ、森で迷子になってしまう。マーシャは１軒の家に迷い込むが、そこはくまの家だった。くまはマーシャを閉じこめ、家に帰してくれない。そこでマーシャは考えに考え、いいことを思いつく。ロシアの昔話。		幼児　３歳～ ８分
21	ももたろう	松居直／作　赤羽末吉／絵	福音館書店 １９６５年
	桃からうまれた「ももたろう」が、鬼退治をする有名な昔話。この絵本の結末は、ももたろうが宝ではなく、姫を連れ帰るというもの。赤羽末吉の絵が美しい絵本。		幼児　５歳～ １０分

＜ことばを楽しむ絵本＞

1	うたのてんらんかい	くどうなおこ／うた　長新太／絵	理論社 １９９３年
	わらびやとんぼ、どんぐり、地球……。季節や自然を感じられる詩が１５編。可愛らしいもの、言葉あそび、いろいろ詰まった詩の絵本。		低学年 ー
2	かぞえうたのほん	岸田衿子／作　スズキコージ／絵	福音館書店 １９９０年
	ユーモア溢れる「かぞえうた」が６つ載っている。「いちばでいぬが　にわとりにらんだ…」「いっちゃんいじわる　いーいーいー…」 「かぞえうた」のナンセンスな世界に、スズキコージさんの絵が。		低学年 ー
3	木いちごつみ 子どものための詩と絵の本	岸田衿子／詩　山脇百合子／絵	福音館書店 １９８３年
	どの詩も出てくるものやテーマが子どもの生活に身近で、小さい子から楽しめる。 １５編の詩が入っている。		幼児　3歳～ ー
4	きょうは みんなで くまがりだ	マイケル・ローゼン／再話 ヘレン・オクセンバリー／絵　山口文生／訳	評論社 １９９１年
	天気のよい日、みんなでクマがりに出かける。「こわくなんかあるもんか！」と、草原や、ぬかるみをどんどん進み、ほら穴に到着。ほら穴の中にはクマがいて…。動きと広がりのある絵からは、草原や川など自然の音が本当に聞こえてくるよう。リズムのよい言葉の繰り返しでお話が進んでいく。子どもたちのあそび歌がもとになっている。		幼児 5分
5	きょだいな きょだいな	長谷川摂子／作　降矢なな／絵	福音館書店 １９９４年
	「あったとさ　あったとさ　ひろい　のっぱら　どまんなか　きょだいな　ピアノが　あったとさ」広い野原のどまんなかには、巨大なせっけん、トイレットペーパー、扇風機などが現れて、子どもたちはそれぞれのびのび遊ぶ。七五調のリズムが心地よい絵本。		幼児　3歳～ 4分
6	月ようびは なに たべる？ ーアメリカのわらべうた	エリック・カール／絵　もりひさし／訳	偕成社 １９９４年
	月曜から日曜までの食べものをうたったアメリカのわらべうた。エリック・カールの描く動物や食べものは、鮮やかで遠目がきく。巻末に楽譜がついている。		3分
7	ことばあそびうた	谷川俊太郎／詩　瀬川康男／絵	福音館書店 １９７３年
	「はなのののはな　はなのななあに　なずななのはな　なもないのばな」「かっぱかっぱらった　かっぱらっぱかっぱらった…」日本語のおもしろさを実感する、楽しい詩がたくさん。続編で『ことばあそびうた　また』もある。		幼児 ー
8	これは のみの ぴこ	谷川俊太郎／作　和田誠／絵	サンリード １９７９年
	「これはのみのぴこ」「これはのみのぴこのすんでいるねこのごえもん」「これはのみのぴこのすんでいるねこのごえもんのしっぽふんずけたあきらくん」と続いていく。どんどんつながっていく言葉と、その関係が面白い。		低学年 5分
9	せんねんまんねん	まど・みちお／詩　柚木沙弥郎／絵	理論社 ２００８年
	あらゆるいのちと、あらゆることはめぐりめぐり、からまりあい、ささえあいながらつづいている		低学年 2分

10	なぞなぞえほん　１のまき～３のまき	中川李枝子／作　山脇百合子／絵	福音館書店 １９８８年
	言葉のリズムがよく、歌いたくなるようななぞなぞの本。答えは子どもたちに身近なものごと。 挿絵のヒントに助けられ、幼い子でも楽しめる。		幼児　４歳 ー
11	もけら もけら	山下洋輔／文　元永定正／絵	福音館書店 １９９０年
	「もけら　もけら　でけ　でけ…」ふしぎな言葉とふしぎな形が作り出す、面白い世界。 読む人それぞれの個性で自由に楽しめる。		幼児　２歳～ ２分
12	もこ もこもこ	谷川俊太郎／著　元永定正／画	文研出版 １９７７年
	「しーん」としているところに「もこ」「もこもこ　にょき」と何かが現れる。ふしぎな世界の中にもストーリー性が感じられる。見返しの部分にも絵と言葉があるため、そこをカバーで隠さないように注意。		赤ちゃん～ ２分

＜知識の絵本＞

1	あげは	小林勇／文・絵	福音館書店 １９６９年
	あげはの卵から幼虫がかえり、蝶になるまでの過程が描かれる。その成長は、図鑑を見ているようでもあり、物語を読んでもらっているようにも感じられる。実際の大きさも描かれているので、読み聞かせ後には子どもの手元に置いてあげたい。		低学年 ５分
2	おいしいおと	三宮麻由子／文　ふくしまあきえ／絵	福音館書店 ２００８年
	ごはんを食べる。「ポホッ　モワーン　ムッチ　ムッチ　ムッチ」 春巻き、ほうれんそうのおひたし、ごはんにお味噌汁…。それぞれのおいしい音で溢れる、お腹いっぱいになる絵本。		幼児　３歳～ ３分
3	クマよ	星野道夫／文・写真	福音館書店 １９９８年
	広々とした原野で、野生のクマの親子が生きている。遠い国アラスカで生活するクマの、息づかいや気配が感じられる。クマを愛した写真家が贈る美しい写真絵本。		中学年 ６分
4	こいぬがうまれるよ	ジョアンナ・コール／文 ジェローム・ウェクスラー／写真　つぼいいくみ／訳	福音館書店 １９８２年
	産まれたばかりの子犬はまだ目も見えないけれど、おっぱいの吸い方をちゃんと知っている。子犬が産まれる瞬間から、歯がはえて、歩き始めるまでを辿った写真絵本。１枚１枚の写真をじっくり見せたい。		低学年 ６分
5	しずくのぼうけん	マリア・テルリコフスカ／作 ボフダン・ブテンコ／絵　内田莉莎子／訳	福音館書店 １９６９年
	バケツから飛び出して、旅に出たしずく。お日さまに照らされ空へのぼったり、雨雲になって地面へ戻ったり、寒い夜には氷になったり…。しずくが冒険する道筋で、水の変化や流れがわかる。絵や色合いが可愛いポーランドの絵本。		幼児　４歳～ ８分
6	しっぽのはたらき	川田健／文　藪内正幸／絵	福音館書店 １９７２年
	動物の特徴をあらわすしっぽは、その役割もさまざま。私たちの知らない、意外なしっぽのはたらきを紹介してくれる絵本。ページを開くたびに、今にも動き出しそうな動物の絵も魅力的。		低学年 ５分
7	じめんのうえとじめんのした	アーマ・E・ウェバー／著　藤枝澪子／訳	福音館書店 １９６８年
	動物や植物が、地面の上と下をうまくつかいわけて生活している様子が単純明快に、楽しい挿絵とともに描かれている。太陽、空気、土、植物、動物などのつながりが、幼い子にも無理なく受け入れられる内容。		幼児　５歳～ ４分
8	せいめいのれきし　改訂版	V・L・バートン／文・絵　石井桃子／訳　真鍋真／監修	岩波書店 ２０１５年
	地球上に生命が生まれてから、いままでの長い歴史を物語る絵本．劇場で舞台をみているような仕立ての挿絵に思わず引き込まれる。元々は、１９６４年に刊行された絵本。最新の知見に合わせて見直された改訂版が、２０１５年に出版された。		低学年 ２９分
9	たんぽぽ	平山和子／文・絵	福音館書店 １９７２年
	道ばたのコンクリートの隙間にも見かけるたんぽぽ。その生態が、分かりやすい言葉と写実的な絵で描かれる。たくましく伸びた長い根、花びらの数など、驚かされることがたくさん。		幼児 ４分

10	ちのはなし	堀内誠一／文・絵	福音館書店 １９７８年
	ころんで血が出てても、時間がたつとかさぶたになる不思議、心臓や肺と血の関係、やさしい実験をおりまぜながら、血の働きをわかりやすく伝えてくれる絵本。		幼児　４歳～ ５分
11	どうぶつえんのおいしゃさん	降矢洋子／作　増井光子／監修	福音館書店 １９８２年
	色々な種類の動物の病気やケガを治療する獣医さん。動物園では飼育員と力を合わせて大きい動物の世話もする。動物園の裏の仕事を見せる絵本。		低学年 ９分
12	はなのあなのはなし	柳生弦一郎／作	福音館書店 １９８２年
	「このほんは、はなのあなをしっかりとふくらましてよんでください」 ユーモアたっぷりの文と絵で、鼻の役割を面白おかしく教えてくれる。		幼児　４歳～ ７分
13	はなをくんくん	ルース・クラウス／作 マーク・サイモント／絵　きじまはじめ／訳	福音館書店 1967年
	雪の降る寒い冬。それぞれの場所で冬眠する動物たちは、ふと目を覚まし「はなをくんくん」。ねぼけまなこで動物たちは外にかけていく。動物たちが集まったその先には、可愛い一輪のお花が咲いている。春が訪れる喜びを感じる絵本。		幼児　３歳～ 3分
14	はるにれ	姉崎一馬／写真	福音館書店 １９８１年
	広々とした草原に、一本のはるにれの木が立っている。季節ごとに変わりゆく木の姿は、まるでドラマを見ているよう。はるにれの一年の姿を写真で捕らえた絵本。 言葉は無いが、ページを開く毎に語りかける気持ちで、一枚一枚をじっくり見せたい。		幼児　４歳～ －
15	ふゆめがっしょうだん	冨成忠夫、茂木透／写真　長新太／文	福音館書店 １９８６年
	静かに見える冬の木々、よくみると面白い顔をした冬芽に出会える。ウサギやコアラ、帽子をかぶった子…。春になると、この面白い顔をした木の芽から、葉が出て花が咲く。 公園や学校で、冬芽を探しに行きたくなる写真絵本。		幼児　４歳～ ２分
16	まめ	平山和子／著	福音館書店 １９７４年
	大豆、えんどう、落花生…色々な種類のきれいな豆、それらは全て種。豆から芽が出て成長し、花を咲かせ、また豆ができるという流れが分かる。写真かと思ってしまうような絵も美しい。		低学年 ４分
17	みず	長谷川摂子／文　英伸三／写真	福音館書店 １９８２年
	生活や遊びの様々な場面で触れる水。やさしい水、ゆかいな水、おそろしい水…。飲んだり、浴びたり、潜ったり。感覚や感触が呼び起こされるような写真絵本。		幼児 ３分
18	みずたまレンズ	今森光彦／作	福音館書店 ２００８年
	雨が降ってきて、太陽が顔をのぞかせたときの、キラキラ光る雨の粒。小さな虫になったつもりで、そっとみずたまをのぞいてみると…何とも不思議な世界。不思議で綺麗なみずたまレンズ。雨の日が待ちどおしくなる写真絵本。		幼児 ３分

19	雪の写真家　ベントレー	J・B・マーティン／作　M・アゼアリアン／絵 千葉茂樹／訳	ＢＬ出版 １９９９年
	雪の美しさに魅せられたウィリーは、小さな農村で、雪の研究と写真撮影に打ち込む。ひたむきに雪と向き合い約５０年、ついに世界的な雪の専門家としてたたえられるようになる。 家族の愛情に見守られ、ひたむきに雪を追いつづけたアマチュア研究家W.A.ベントレーの生涯を綴った伝記絵本。		中学年 １１分
20	わたし	谷川俊太郎／文　長新太／絵	福音館書店 1976年
	わたしは、男の子から見ると、女の子。赤ちゃんから見ると、お姉ちゃん。お兄ちゃんから見ると、妹。犬から見ると…人間。 相手によって変わる「わたし」の呼び名。誰もが抱く「わたしって何もの？」という疑問に、谷川俊太郎さんの詩が、やさしく答える。		低学年 3分

＜物　語＞

1	あおい目のこねこ	エゴン・マチーセン／文　瀬田貞二／訳	福音館書店 1965年
	とても元気なあおい目のこねこは、ネズミの国を探しに出かける。しかし、道で会う生き物は場所を教えてくれないし、お腹もすいてくるが、ネズミの国はなかなか見つからない。そのうち５匹のきいろい目のこねこたちにであい…。		幼児　４歳～ １１分
2	あおくんときいろちゃん	レオ・レオニ／文	至光社 1967年
	絵の具で描かれた青い丸と黄色い丸。それが、あおくんときいろちゃん。ふたりはとても仲良し。ある日、あおくんときいろちゃんは街でばったり出会い、嬉しくて嬉しくてくっつくと、緑になってしまう…。様々な色や形が、いきいきと動き回るユニークなデザインの絵本。		幼児 3分
3	あかいふうせん	イエラ・マリ／作	ほるぷ出版 １９７６年
	だんだんとふくらんでいく赤い風船が、少しずつ形を変えていく。りんごから蝶へ、蝶から花へ…。 白地に黒の線画と、形を変える赤が鮮明な印象の、字のない絵本。		幼児 ー
4	ありこのおつかい	石井桃子／作　中川宗弥／画	福音館書店 １９６８年
	ありのありこは、お母さんにお使いを頼まれ、森へ出かける。お母さんとの約束を守らず、みちくさをくっていると、カマキリに出会い、ありこはペロリと飲み込まれてしまう。カマキリはムクドリに、ムクドリはヤマネコに、ヤマネコはクマに…。しかし最後は、みんなお腹から出てきて仲直り。		幼児　3歳～ 10分
5	アンガスとあひる	マージョリー・フラック／作・絵　瀬田貞二／訳	福音館書店 1974年
	アンガスは知りたがりの子犬。ある日、生け垣の向こう側から聞こえるやかましい音の正体を突き止めようと外に飛び出し、2羽のアヒルと出会う。アンガスはアヒルを追いかけるが、やがて攻守交代。アヒルにしっぽをつつかれ、安全な家に逃げ帰る。		幼児　4歳～ 4分
6	アンディとらいおん	ジェームズ・ドーハーティ／文・絵 むらおかはなこ／訳	福音館書店 1961年
	ライオンのことばかり考えていたアンディは、足にトゲがささった本物のライオンと出会い、助けてやる。ある日、アンディがサーカス見物をしていると、芸をしているライオンが急に暴れ出し、アンディに襲いかかる。しかしそのライオンはアンディがトゲを抜いてやったライオンだった。再会を喜ぶアンディとらいおんは踊り出す。起承転結のはっきりしたストーリー。		幼児　5歳～ 9分
7	いたずらきかんしゃちゅうちゅう	V・L・バートン／文・絵　むらおかはなこ／訳	福音館書店 1961年
	小さなきかんしゃのちゅうちゅうは、毎日重い客車を引いて走っている。ある日、ちゅうちゅうは客車を引くのが嫌になり、1人で勝手に走り出した。 長い絵本だが、ドラマチックな展開で幼児から楽しめる。		幼児　４歳～ 12分
8	いたずらこねこ	バーナディン・クック／文　レミイ・シャーリップ／絵 まさきるりこ／訳	福音館書店 1964年
	小さな池に小さなカメが住んでいる。隣のうちにはこねこがすんでいて、ある日二匹は庭の真ん中で出会う。初めてカメを見たこねこは、カメをじっと見つめポンとたたく。頭を引っ込めたカメにびっくりするこねこ。カメを見つめながら後ずさりしたこねこは、池に落ち、びっくりして家に逃げ帰る。		幼児　２歳～ 9分
9	おおきくなりすぎたくま	リンド・ワード／文・画　渡辺茂男／訳	ほるぷ出版 １９８５年
	ジョニーは森で見つけたこぐまを育てはじめた。しかし、いたずら好きなこぐまは、村の困り者。おまけに何でも食べて、みるみるうちに大きなくまに…。くまを森に帰そうとするが、どんなに遠くにおいてきても戻ってきてしまう。くまを鉄砲で撃とうと決めるが、偶然動物園の人たちに会いくまは引き取られる。		中学年 12分

10	おおきなおおきなおいも	赤羽末吉／作	福音館書店 1972年
	芋掘り遠足が雨で１週間延期になってしまう。１週間たつとお芋は土の中でどんどん大きくなると聞き、子どもたちは大きな紙をつないで大きな大きなお芋を描くことにした。描いたお芋は何枚ページをめくっても「まだまだ」と続き、聞き手を驚かせる。		幼児 6分
11	おかあさんのたんじょう日 『おかあさんだいすき』所収	マージョリー・フラック／文・絵 光吉夏弥／訳	岩波書店 1954年
	だにーがお母さんの誕生日の贈りものを見つけに行くおはなし。 にわとりやがちょう、やぎなどに尋ねながら探し歩くが、なかなか良い贈りものが見つからない。最後にたった１人で大きな熊のもとへ行き、名案をもらって帰ってくる。		幼児 7分
12	おじさんのかさ	佐野洋子／作・絵	講談社 1992年
	おじさんは、黒い立派な傘を大事にしている。雨が降ったら人の傘に入って、自分の傘は雨が降っても決してささない。ある雨の日の公園で、男の子が「あめがふったらポンポロロン」と歌っているのを聞き、おじさんも自分の傘を開いてみることにする。		低学年 7分
13	おしゃべりなたまごやき	寺村輝夫／文　長新太／画	福音館書店 1972年
	卵焼きが大好きな王さまは、お城でたくさんのにわとりを育てていた。ある日、王さまはぎゅう詰めのにわとりがかわいそうになり、にわとり小屋の戸を開けてやった。すると、にわとりたちが逃げ出して、お城の中は大騒ぎ！戸を開けた犯人さがしが始まった。		低学年 12分
14	おばけのジョージー	ロバート・ブライト／作・絵　光吉夏弥／訳	福音館書店 1978年
	ちいさなおばけのジョージーは、ホイッティカーさんの家に住んでいる。同じ時間に階段をみしりといわせ、ドアをぎーっといわせるのがジョージーの仕事。ところがある日、階段やドアが修理され、いつもの物音が立てられなくなる。 おばけといっても怖くなく、人をおどかすより自分の方が怖くなるような、可愛らしいおばけの話。		幼児　4歳～ 5分
15	おふろだいすき	松岡享子／作　林明子／絵	福音館書店 1982年
	「ぼく」がおもちゃのアヒルとお風呂に入ると、湯船から大きなカメやペンギン、オットセイなどが現れる。お風呂場が大きくなり、不思議な空間が広がっていく様子が手に取るように描かれている。文章は長いが、幼児でもよく聞く。		幼児　4歳 11分
16	おまたせクッキー	パット＝ハッチンス／文　乾侑美子／訳	偕成社 1987年
	おかあさんがクッキーを焼いた。おなかがぺこぺこな二人の子どもは大喜び。二人がクッキーを食べようとするたびに、玄関のベルがなり、友だちがだんだん増えていく。 数のおもしろさも感じられる絵本。		幼児 4分
17	おやすみみみずく	パット＝ハッチンス／作　渡辺茂男／訳	偕成社 1977年
	みみずくが眠ろうとすると、はちがぶんぶん、リスが木の実をかりかり、からすがかーかー…次々と鳥たちが集まり騒がしく、みみずくを寝かせてくれない。やっと暗くなり、あたりが静かになると、今度はみみずくが「ぶっきょっこー」と鳴き、他の鳥たちが眠れない。		幼児 5分
18	かいじゅうたちのいるところ	モーリス・センダック／作　神宮輝夫／訳	冨山房 1975年
	ある晩、マックスはオオカミのぬいぐるみを着て大暴れ。お母さんにタご飯抜きで寝室に放り込まれる。すると寝室が森になり、波が打ち寄せ、船に乗って怪獣たちのいるところへ。 こどもを不思議な世界に連れて行く絵本。文章のない踊りの場面は、ゆっくり見せてあげたい。		幼児 5分

19	かさどろぼう	シビル・ウェッタシンハ／作　猪熊葉子／訳	徳間書店 2007年
	スリランカの小さな村では、誰も傘を知らない。村のキリ・ママおじさんは町へ行って初めて傘を買うが、帰り道で何ものかに盗まれてしまう。何度買っても同じことが起きるが、それはいたずらな子ザルのしわざだった。		低学年 6分
20	かしこいビル	ウイリアム・ニコルソン／作 松岡享子、吉田新一／訳	ペンギン社 1982年
	ある日、メリーに「おばさんのうちへ遊びにいらっしゃい」という手紙が届く。トランクに人形や笛、兵隊人形のかしこいビルなどをたくさんの者を詰め込もうとするが、うまく入らない。時間が無くなりめちゃくちゃに押し込んでフタをしめるが、大事なビルを入れ忘れて出かけてしまう。言葉は少ないが、絵が語ることの多いイギリスの古典的作品。		幼児 3分
21	がちょうのペチューニア	ロジャー・デュボワザン／作　松岡享子／訳	冨山房 1999年
	がちょうのペチューニアは、ある日草地で本を見つける。「本に親しむ者は賢くなる」と聞いたペチューニアは、いつも本を持ち歩き賢くなった気になる。色々な動物の相談にのるが、混乱させるような答えで皆を振りまわし、最後には花火とキャンデーを間違えてケガをしてしまう。そして、大事なのは本の中身と気づき、ペチューニアは文字を勉強し始める。		中学年 13分
22	かばくん	岸田衿子／作　中谷千代子／絵	福音館書店 1962年
	日曜日はたくさんの子どもで動物園もにぎやか。かばくんは水の中を泳いだり、きゃべつを食べたり、そして夜になると親子で並んで寝てしまう。 のんびりとおだやかな動物園のかばの一日を描いた絵本。		幼児　3歳～ 4分
23	かもさんおとおり	ロバート・マックロスキー／文・絵　渡辺茂男／訳	福音館書店 1965年
	かもさん夫婦は、チャールズ川の小さな島でたまごを生む。ある日、かわいい８羽のこがもたちを連れて川から公園へ引っ越すことに。かもたちは１列になって車の多い町の中を歩き出す。おまわりさんはかもを安全に通すために交通整理。そして、かもたちは無事公園までたどり着く。		低学年 11分
24	からすたろう	八島太郎／文・絵	偕成社 1979年
	ある学校に、皆から「ちび」と呼ばれるおかしな男の子がいた。ちびは、勉強もできず、友達もできない。よそのクラスの子からもからかわれ、いつも一人でいた。年月がたち、ちびは6年生になり、新しい先生がやってくる。この先生はちびとよく二人で話をする。その年の学芸会、ちびはカラスの鳴き声のまねをし、生徒の心を動かす。先生は、ちびが毎日通う遠い道のりや生活を説明すると、もう誰もちびと呼ぶ者はいなくなり、「からすたろう」と呼ばれるようになる。		中学年 8分
25	ガンピーさんのふなあそび	ジョン・バーニンガム／作　光吉夏弥／訳	ほるぷ出版 1976年
	川のそばに住んでいるガンピーさんは舟で出かけることにした。子どもやうさぎ、ねこ、犬、ぶた等が次々に「乗せて」とやってくる。おとなしくしていることを約束に、みんなを舟に乗せるが、舟の中は大混乱。みんな、川の中に落ちてしまう。みんなで岸に泳ぎ着き、太陽で体を乾かし、お茶にする。		幼児　3歳～ 5分
26	きかんしゃやえもん	阿川弘之／文　岡部冬彦／絵	岩波書店 1959年
	やえもんは、田舎町にいる年とった機関車。長年働いて体が痛く、近ごろ機嫌が悪い。その上、都会に出ると電気機関車たちにバカにされてしまう。ある日、田舎町に帰る途中、あまりに怒っていて火の粉をはき、稲むらに火をつけてしまう。駅員の会議で、やえもんを走らせるのを止め、くず鉄にすることに決まる。そこにやってきた博物館の人は、古く珍しい機関車やえもんを引き取ることにする。やえもんは、博物館で楽しく暮らす。		幼児 11分
27	きつねとねずみ	ヴィタリー・ワレンチノヴィチ・ビアンキ／作 山田三郎／画　内田莉莎子／訳	福音館書店 1967年
	きつねのだんながねずみの巣穴にやってくる。待ち伏せされるが、ねずみの巣穴には寝る場所も、えさの貯蔵庫もある。巣穴を掘り返されたって、横穴から逃げられる。ユーモア溢れるきつねとねずみの短い会話の中に、自然の営みが見える。		幼児　3歳～ 5分

28	きつねのホイティ	シビル・ウェッタシンハ／作　松岡享子／訳	福音館書店 1994年
	スリランカの村に三人の元気なおかみさんが住んでいた。そこへ、食いしん坊ギツネのホイティが、干してある洗濯物を着て人間のふりをし、おかみさんの家へタ食を食べに行く。おかみさんはホイティの様子が面白くてだまされたふりをする。しかしその後、森でホイティが人間をばかにした歌を歌ってるのを聞き、おかみさんたちは仕返しにホイティをからかってやる。		幼児 10分
29	木はいいなあ	ユードリイ／作　シーモント／絵　西園寺祥子／訳	偕成社 1976年
	木が茂った森は活き活きしている。夏は木陰が涼しく、秋は落ち葉で色々遊べる。「木をうえるといいよ」苗木は毎年少しずつ大きくなっていく。 木のある暮らしの素晴らしさを感じられる絵本。		低学年 4分
30	キャベツくん	長新太／作・絵	文研出版 １９８０年
	キャベツくんはおなかぺこぺこのブタヤマさんに会う。ブタヤマさんはキャベツくんを食べようとするが、「ぼくを食べるとキャベツになるよ！」と言われ、そのうえ、空にはキャベツになったブタヤマさんの姿が浮かびあがる。ブタヤマさんはびっくりしてキャベツくんを食べることを忘れてしまう…。 ページをめくるたびに思わず笑ってしまうナンセンス絵本。		幼児 5分
31	くだもの	平山和子／作	福音館書店 １９８１年
	すいかやもも、りんごになし…皮をむいて、「さあどうぞ」。 みずみずしく、本物そっくりのおいしそうなくだものに、思わず手が出てしまう絵本。		赤ちゃん～ 2分
32	くまのコールテンくん	ドン・フリーマン／作　松岡享子／訳	偕成社 1975年
	おもちゃ売り場にいる、くまのコールテンくんは、早く誰か自分を家に連れて行ってくれないか待っている。ある日、女の子がコールテンくんを欲しがるが、つりひものボタンが取れているので買ってもらえない。その夜、コールテンくんはなくしたボタンを探してデパートを探検する。		幼児 8分
33	ぐりとぐら	中川李枝子／文　大村百合子／絵	福音館書店 1963年
	食べることと料理が好きなのねずみぐりとぐら。ある日森へ出かけると、大きな卵を見つけカステラを作ることに。カステラの焼けるいいにおいで集まってきた森の動物たちに、ぐりとぐらはカステラをごちそうする。 お鍋から顔を出す大きな黄色いカステラは、絵本を手にとる子どもから大人まで、みんなを喜ばせる。		幼児　3歳～ 5分
34	ぐるんぱのようちえん	西内みなみ／作　堀内誠一／絵	福音館書店 1965年
	とっても大きなぞうのぐるんぱは、ある日のジャングル会議で、働きに出ることが決まる。ビスケット屋さんやお皿屋さんなど、ぐるんぱは行く先々で大きすぎるものを作り失敗してしまう。しかし、最後にぐるんぱは、幼稚園を開くことに。たくさんの子どもたちに囲まれて、大成功する。		幼児　4歳～ 8分
35	くんちゃんのだいりょこう	ドロシー・マリノ／作　石井桃子／訳	岩波書店 1986年
	こぐまのくんちゃんは、冬ごもりが近づいたある日、南の国へ渡る鳥たちについて行こうとする。しかし、お母さんにキスするのを忘れたことに気づき、家へ戻る。その後も、双眼鏡や釣り竿などの忘れ物に気づき、丘の上と家を行ったり来たり…。とうとうくたびれて、くんちゃんは寝てしまう。		幼児 6分
36	げんきなマドレーヌ	ルドウィッヒ・ベーメルマンス／作・絵 瀬田貞二／訳	福音館書店 1972年
	パリの古い屋敷に12人の女の子とミス・クラベルが住んでいた。中でも一番おちびで元気なのがマドレーヌ。ある日の真夜中、マドレーヌは盲腸になり手術を受ける。ミス・クラベルと女の子たちがお見舞いに行くと、病室はおもちゃやお菓子でいっぱい。その夜、女の子たちは「盲腸を切って」と騒ぐが、ミス・クラベルは落ち着いて女の子たちを寝かしつける。		幼児　4歳～ 5分

37	ごきげんならいおん	ルイーズ・ファティオ／文 ロジャー・デュボアザン／絵　村岡花子／訳	福音館書店 1964年
	フランスの動物園にいつもごきげんならいおんが住んでいた。町の人は皆、このらいおんに挨拶をする。ある日、らいおんは、家の戸が開いていたので町に出かけることにする。すると、町中大騒ぎ！飼育係の息子のフランソワだけがいつものように挨拶し、二人は一緒に動物園へ帰る。		幼児　5歳～ 9分
38	こぐまのくまくん	E. H・ミナリック／作 モーリス・センダック／絵　松岡享子／訳	福音館書店 1972年
	「くまくんとけがわのマント」「くまくんのおたんじょうび」「くまくんのつきりょこう」「くまくんのねがいごと」の４編のお話が入っている。くまくんの愛らしい行動や言葉が子どもの気持ちに添っている。お母さんとくまくんのやりとりに愛情が感じられるお話。		4歳～ ー
39	こすずめのぼうけん	ルース・エインズワース／作 堀内誠一／絵　石井桃子／訳	福音館書店 1976年
	こすずめはお母さんから初めて飛び方を教わる。すると、こすずめは世界中を見ようと張り切り、1人で飛び続ける。疲れたはてたこすずめは、休むところを探すがなかなか見つからない。もう飛ぶこともできず歩いていたところに、やっとお母さんと出会う。お母さんの背中に負ぶさり巣に戻り、温かい翼の下で眠る。		幼児　4歳 7分
40	こねこのぴっち	ハンス・フィッシャー／文・絵　石井桃子／訳	岩波書店 1987年
	ぴっちはりぜっとおばあさんの家に住む、小さくて可愛いこねこ。ある日ぴっちは、外で遊んでいると、うさぎと一緒に小屋へ入ってしまい、一晩そこで過ごすことに。夜になると、森から黒いけものたちが小屋の前へやってくるが、危ないところで犬が助けにきてくれる。ぴっちはお家が一番よいところだと気づく。		幼児 11分
41	サリーのこけももつみ	ロバート・マックロスキー／文・絵　石井桃子／訳	岩波書店 1986年
	サリーはお母さんとこけももを摘みに行く。熊の親子もこけももを食べに山にやってくる。サリーはこけももを摘んでいるうちに、お母さん熊をお母さんと思いついて行ってしまう。子熊もこけももを食べているうちに、サリーのお母さんについて行く。お互いお母さんを勘違いするが、無事に再会し、家に戻る。		低学年 11分
42	じごくのそうべえ	田島征彦／作	童心社 1978年
	つなわたりから落ちた軽業師のそうべえは、地獄で歯ぬき師のしかい、医者のらくあん、山伏のふっかいと出会う。4人は鬼に食べられたり、熱湯の釜に入れられたり、針の山に放り上げられたが、それぞれの特技をいかして切りぬける。鬼は困り果て、そうべえたちを地獄から追い出す。上方落語「地獄八景」を絵本にしたもの。		中学年 9分
43	しずかなおはなし	サムイル・マルシャーク／文 ウラジミル・レーベルデフ／絵　内田莉莎子／訳	福音館書店 1963年
	はりねずみの家族がある秋の真夜中、散歩に出かける。そこに2匹の狼がしのびよる。はりねずみはそれに気づき、針を逆立てまりのようになる。針は痛いが狼はこの獲物を諦めきれない。そこに、猟師の鉄砲の音がして、狼は逃げていく。はりねずみの家族は無事に帰り着く。		幼児　3歳～ 3分
44	しょうぼうじどうしゃ じぷた	渡辺茂男／作　山本忠敬／絵	福音館書店 1963年
	じぷたは古いジープを改造したちびっこの消防車。はしご車ののっぽくん、高圧車のぱんぷくん、救急車のいちもくさんは、じぷたのことをバカにしている。ある日、山小屋の火事でじぷたが活躍することに。じぷたはたちまち、子どもたちの人気者になる。		幼児　4歳～ 5分
45	ジルベルトとかぜ	マリー・ホール・エッツ／作　たなべいすず／訳	冨山房 1975年
	風が戸口で「おーい」と呼ぶと「ぼく」は風船を持って遊びに出る。風は風船を木の上に持ってったり、洗濯物をゆすって遊んだり、「ぼく」の傘を取ろうとしたりする。 目に見えない風が見えるように描かれ、読むと風を感じられる絵本。		幼児 6分

46	しろいうさぎとくろいうさぎ	ガース・ウィリアムズ／文・絵　松岡享子／訳	福音館書店 1965年
	広い森に白いうさぎと黒いうさぎが住んでいた。2匹は毎日一緒に楽しく遊んでいた。しかし、馬とびをしてもかくれんぼをしても、黒いうさぎは悲しそうな顔をして座りこんでしまう。白いうさぎが訳を尋ねると、黒いうさぎは「いつまでも君と一緒にいられますように」と願っていたと答える。こうして2匹のうさぎは結婚し、その後、楽しく暮らす。		幼児　4歳～ 6分
47	すてきな三にんぐみ	トミー・アンゲラー／作　いまえよしとも／訳	偕成社 1969年
	黒マントに黒い帽子、こわい三人組の泥棒のお話。彼らは夜な夜な馬車を襲い、宝をうばって隠れ家へ。ある夜襲った馬車の中にのっていたのは、みなしごのティファニーちゃんたった一人。それから三人組は、寂しく暮らす孤児を集め、お城を買い、皆で一緒に暮らすことに。		低学年 4分
48	せんたくかあちゃん	さとうわきこ／作・絵	福音館書店 1978年
	洗濯が大好きなかあちゃんは、天気のよい日、あっという間に家中のものを洗ってしまう。そこへ、かみなりさまが落ちてきて物干しなわにひっかかる。かみなりさまもかあちゃんに洗濯されると、顔がなくなってしまう。すっかり乾いた後、子どもたちはクレヨンで顔を描くことに。するとかみなりさまは、すっかりいい男に。それを聞いたたくさんのかみなりたちが、次の日、せんたくかあちゃんの元に落ちてくる。		幼児　3歳～ 7分
49	そらいろのたね	なかがわりえこ／文　おおむらゆりこ／絵	福音館書店 1964年
	ゆうじはひこうきと交換に、きつねにそらいろのたねをもらう。庭にタネを植え育てると、次の日そこから小さなそらいろの家が出てきた。その家は少しずつ大きくなり、ひよこや猫から、ゆうじの友達までも入れるくらいに。家がお日さまにぶつかるくらい大きくなると、花が散るようにくずれはじめる。しばらくすると、そらいろの家はどこにもなくなっていた。		幼児　4歳～ 5分
50	だるまちゃんとてんぐちゃん	加古里子／作・絵	福音館書店 1967年
	だるまちゃんは、てんぐちゃんと遊んでいると、てんぐちゃんの持っているうちわが欲しくなる。てんぐちゃんの帽子や履き物、長い鼻までも欲しくなる。だるまちゃんは工夫して、やつでの葉をうちわに、おわんを帽子、まないたで履き物、長い鼻はおもちで作った。そして二人は仲良く遊ぶ。		幼児 5分
51	ちいさいおうち	V・L・バートン／文・絵　石井桃子／訳	岩波書店 1965年
	ひなぎくの咲く静かな丘に、ちいさいおうちがたっていた。毎日幸せに暮らしていたが、時の経つにつれ、周りには高いビルがたち、お日さまもお月さまも見えなくなってしまう。そこへ、おうちを建てた人の子孫が広い野原の真ん中におうちを移すことにする。そして、ちいさいおうちはまた静かな場所で、幸せに暮らす。		低学年 15分
52	ちいさなねこ	石井桃子／作　横内襄／絵	福音館書店 1963年
	ちいさなねこが一人で外へ出かける。子どもに捕まりそうになったり、車にひかれそうになったり。大きな犬に追いかけられ木に登って鳴いていると、お母さんねこが助けに来る。お母さんねこは犬を追い払い、こねこを口にくわえ家に帰って行く。		幼児3歳～5歳 4分
53	ちいさなヒッポ	マーシャ・ブラウン／作　内田莉莎子／訳	偕成社 1984年
	ヒッポはいつもお母さんと一緒にいる小さなかば。ある日、ヒッポはお母さんからかばの言葉「グァオ」を教わる。お母さんのそばにいれば怖いものなしだが、ヒッポが一人で水面へ上がっていくと大きなワニにつかまってしまう。ヒッポは「グァオたすけて！」と叫ぶとお母さんカバが助けにきて、ワニを放り投げてくれる。		幼児 4分
54	チムとゆうかんなせんちょうさん	エドワード・アーディゾーニ／作　瀬田貞二／訳	福音館書店 2001年
	船乗りになりたくてたまらないチムは、ある日こっそり船に乗り込む。船長に怒られ、つらい仕事をさせられるが、一生懸命取り組みやがて船員たちから信頼される。しかし、嵐が来て船は難破。チムと船長は船にとり残される。危機一髪で救命ボートに助けられ、二人は無事帰ることに。		幼児　5歳～ 12分

55	ティッチ	パット＝ハッチンス／作・絵　いしいももこ／訳	福音館書店 1975年
	ティッチは小さな男の子。姉さんのメアリと兄さんのピートは何でもティッチより大きく立派なものをもっている。ある時、ピートは大きなシャベル、メアリは大きな植木鉢をもっていると、ティッチは小さなタネを持っていた。そのタネを植えると、芽を出しぐんぐん伸び、兄姉の背よりもずっと大きくなる。		幼児　3歳～ 2分
56	どうながのプレッツェル	マーグレット・レイ／文　H.A.レイ／絵 渡辺茂男／訳	福音館書店 1978年
	5月のある朝5匹のダックスフントの子犬が生まれる。そのうちの1匹、プレッツェルは、世界一胴長のダックスフントになった。プレッツェルは向かいの家の犬グレタが好き。しかしグレタは胴長は嫌いという。ある日、グレタは遊んでいると深い穴に落ちてしまうが、プレッツェルが胴長をいかしてグレタを助ける。そして2匹は結婚することに。		低学年 4分
57	どうぶつのこどもたち	サムイル・ヤーコヴレヴィチ・マルシャーク／文 ウラジミル・V・レーベテフ／絵　石井桃子／訳編	岩波書店 １９５４年
	動物園に生まれた可愛い動物の赤ちゃんをうたった「おりのなかのこども」。アヒルの子を一生懸命育てるめんどりのお母さんのお話「めんどりと十ぱのあひるのこ」。お母さんの子守歌が嫌といってなかなか寝ない子ネズミのお話「ばかなこねずみ」。3編のお話が入っている。		幼児 ー
58	どろんこハリー	ジーン・ジオン／作 マーガレット・ブロイ・グレアム／絵　渡辺茂男／訳	福音館書店 1964年
	ハリーは黒いぶちのある白い犬。お風呂が大嫌いで、ある日、ブラシを庭に埋め家の外へ飛び出す。外で遊び汚れて、白いぶちのある黒い犬になってしまう。家に帰ると、家族はハリーとわからない。ハリーは庭に埋めたブラシを掘り出し、家のお風呂に飛び込む。子どもたちに体を洗ってもらい、やっとハリーとわかる。		低学年 5分
59	にぐるまひいて	ドナルド・ホール／文　バーバラ・クーニー／絵 もきかずこ／訳	ほるぷ出版 1980年
	10月、父さんは荷車に一年間家族みんなで作り育てたものを積み込む。荷車がいっぱいになると牛をひいて10日がかりで街へ売りに出る。そして売ったお金で待っている家族のために買い物をし、長い道のりを戻る。そしてまた新たな一年が始まる。 100年以上前のアメリカの暮らしぶりとのどかさを伝える絵本。		中学年 7分
60	ねずみくんのチョッキ	なかえよしを／文　上野紀子／絵	ポプラ社 1974年
	お母さんが編んでくれたチョッキを、ねずみくんが着ていると、アヒルや猿や象が「いいチョッキだね　ちょっと着せてよ」とやって来る。するとどんどんチョッキが伸びてしまう。それを見たねずみくんはショックを受けるが、最後のページに嬉しい出来事が待っている。		幼児 2分
61	ねぼすけスーザのおかいもの	広野多珂子／作	福音館書店 1991年
	いつもねぼすけのスーザは、ある日、マリアおばさんのお誕生日プレゼントを街へ買いにいくために早く起きる。プレゼントにとても素敵なイスを見つけるが、お金が足りず買えなかった。そこで、捨ててあったイスを持ち帰り、ペンキをぬり飾って、手作りのきれいな赤いイスをプレゼントする。		幼児　3歳～ 5分
62	はじめてのおつかい	筒井頼子／作　林明子／絵	福音館書店 1976年
	みいちゃんは5歳。ママに牛乳を買ってくるようおつかいを頼まれて出かける。お店に着くまでの道のりで遭遇すること、お店の人になかなか声をかけられず牛乳が買えないことなど、頼まれたものが買えてほっとする場面など、初めて一人でおつかいに行く緊張と嬉しさが伝わる。		幼児 6分
63	はたらきもののじょせつしゃけいてぃー	V・L・バートン／文・絵　石井桃子／訳	福音館書店 1978年
	けいてぃーはキャタピラーのついている立派なトラクター。ある日大雪が降り、人も車も外に出られなくなってしまう。そこでけいてぃーは警察署や郵便局など町中の雪をどんどんかきのけ道をつくっていく。途中でくたびれても仕事をやめたりしない。そのおかげで、町の生活は少しずつ元に戻っていく。		低学年 10分

64	ピーターのいす	エズラ＝ジャック＝キーツ／作　きじまはじめ／訳	偕成社 １９６９年
	ピーターに妹が生まれた。今までピーターが使っていた物が次々とピンクに塗られ、妹のものになっていく。ピーターはまだ塗られていないイスを持って家出をするが、それに座るにはもう自分は大きくなりすぎていることに気づく。そして、そのイスをお父さんと一緒にピンクに塗ることにする。		幼児 3分
65	ひとまねこざる	H. A. レイ／文・絵　光吉夏弥／訳	岩波書店 1982年
	ジョージはとっても知りたがり屋の元気なこざる。動物園を抜け出したジョージは大好きな黄色い帽子のおじさんを探して、色々な事件をまき起こす。レストランの台所や、高いビルの窓ふきそうじでも知りたがり屋を発揮するが、黄色い帽子のおじさんに助けられる。やがて自分が主役の映画に出演する。		幼児 11分
66	１００まんびきのねこ	ワンダ・ガアグ／文・絵 石井桃子／訳	福音館書店 1961年
	昔、おじいさんとおばあさんは寂しいのでネコを飼うことにする。おじいさんはネコでいっぱいの丘から全部のネコを連れて帰る。おばあさんに、こんなたくさんのネコは飼えないと言われ、ネコたちに一番きれいなネコを決めさせる。すると、けんかを始め、最後には小さな痩せたネコ一匹が残っていた。二人がそのネコを世話すると、世界で一番きれいなネコになる。		幼児　３歳～ 11分
67	ふしぎなたけのこ	松野正子／文　瀬川康男／絵	福音館書店 1966年
	たろは、たけのこ掘りに行く。そこで、上着をかけたたけのこが、ぐぐぐっと伸びた。上着を取ろうと慌ててたけのこに飛びつくと、そのたけのこはぐんぐん伸び雲の上へ。両親や村人はたろを助けようと斧でたけのこを切る。倒れたたけのこに沿って走っていくと、たろのいるところに着き、そこには海が広がっていた。村人は海の幸を採れるようになり、幸せに暮らす。		低学年 4分
68	ふしぎなナイフ	中村牧江・林健造／作　福田隆義／絵	福音館書店 1997年
	ふしぎなナイフがまがる。ねじれる、おれる、われる、とける…。ナイフが変幻自在に姿を変える。 写実的な絵で、思いがけないナイフの変化にもリアリティのある面白い絵本。		中学年 2分
69	フレデリック	レオ・レオニ／文　谷川俊太郎／訳	好学社 1969年
	古い石垣に野ねずみが住んでいた。冬が近いのでせっせと食べものを集めている。しかし、フレデリックだけは動かず静かに座っていた。冬に備えて日の光や色、言葉を集めてるのだという。やがて雪が降り巣にこもると、次第に食べものはなくなり凍えそうになる。そこでフレデリックは日の光や色について話す。みんなは光や色を想像し、詩人フレデリックに拍手喝采する。		中学年 4分
70	ペレのあたらしいふく	エルサ・ベスコフ／作・絵　小野寺百合子／訳	福音館書店 1976年
	ペレは子羊を一匹飼っていた。上着が短くなったので、その羊の毛を刈り取る。おばあちゃんに糸を紡いでもらい、自分で糸を染め、お母さんにきれを織ってもらい、仕立屋さんに服にしてもらう。土曜日の夕方、服は出来上がり、日曜の朝、ペレは子羊にありがとうと言う。		低学年 3分
71	ぼくを探しに	シェル・シルヴァスタイン／文　倉橋由美子／訳	講談社 １９７７年
	「何かが足りない　それでぼくは楽しくない」 「ぼく」はゆっくりころがり足りないかけらを探しに行く。 絵も文章もとてもシンプル。読み手それぞれの受け止め方ができ、幅広い年齢で楽しめる。		幼児～ 7分
72	まりーちゃんとひつじ	フランソワーズ／文・絵　与田準一／訳	岩波書店 １９５６年
	まりーちゃんとひつじのぱたぽんはとっても仲良し。ぱたぽんが子どもをたくさん産んだら、その毛を売って好きなものが買えるという夢がふくらむ。しかしぱたぽんは、きれいなはらっぱに住めれば満足。ぱたぽんは1匹しか子どもを産まなかったけれど、まりーちゃんはよろこぶ。		幼児 5分

73	めっきらもっきら どおんどん	長谷川摂子／作　ふりやなな／画	福音館書店 1985年
	「かんた」が神社でめちゃくちゃな歌を歌うと、着いたところは夜の山。へんてこりんな３人のおばけと一緒に空を飛んだり、おいしいものを食べたりして遊ぶ。やがておばけたちは眠ってしまう。かんたは心細くなり「おかあさーん」と呼ぶと、元の神社に戻ってくる。		幼児 5分
74	もぐらとずぼん	エドアルド・ペチシカ／文 ズデネック・ミレル／絵　内田莉莎子／訳	福音館書店 1967年
	もぐらは大きなポケットのついたずぼんを見つけ、それがほしくてたまらない。ずぼんをつくるために、「あま」の花を育て、色々な虫や動物に手助けしてもらい、糸を紡ぎ布を織る。えびがにに布を切ってもらい、よしきりにずぼんを縫ってもらう。そして、もぐらによく似合うずぼんが出来上がる。		低学年 12分
75	ものぐさトミー	ウィリアム・ペーン・デュボア／文・絵　松岡享子／訳	岩波書店 1977年
	トミー・ナマケンボは、電気じかけの家に住んでいる。ベッドから起きるのも、服を着るのも、ごはんを食べるのも、全て自動に済ませてくれる機械まかせ。ところがある夜、嵐で電気が止まってしまう。家が動き出したのは、その七日後。冷たい水風呂に落とされ、七日分の食事が降ってくることに。		中学年 13分
76	もりのなか	マリー・ホール・エッツ／文・絵　まさきるりこ／訳	福音館書店 1963年
	ぼくは新しいラッパを持って森へ散歩に出かける。すると、ライオン、２匹のゾウ、クマやサルなどがついてきて、森の中を行進する。動物たちと遊び、かくれんぼうをしていると、お父さんが迎えに来た。ぼくはお父さんに肩車をしてもらい家に戻る。そして、動物たちに、またくるねと告げる。		幼児 5分
77	やさいのおなか	きうちかつ／作・絵	福音館書店 1997年
	カボチャやキュウリ、トマト…「これ　なあに」と白黒で野菜の断面があり、ページをめくると答えがある。いつも食べている野菜でも、意外と分からないものがあり幅広い年齢で楽しめる。		幼児 2分～
78	ゆきのひ	エズラ＝ジャック＝キーツ／文・絵　きじまはじめ／訳	偕成社 1969年
	冬のある朝、ピーターが目覚めると、まっ白な雪がつもっていた。ピーターは外へ飛び出したくさん遊ぶ。家に帰りお母さんに雪の中の冒険を話し、何回もその冒険を思い返す。ピーターは次の日も雪が残っているか心配するが、翌日また新しい雪がつもっていて、今度はとなりの友達と遊びに出かける。		幼児 5分
79	よあけ	ユリー・シュルヴィッツ／作・絵　瀬田貞二／訳	福音館書店 1977年
	暗く静かな夜の山の湖にそよ風が吹く。小鳥が鳴き始める。少しずつ少しずつ明るくなり、さっとまぶしく光がさす。 自然の静けさ、夜が明けていく色の移ろいを感じる絵本。		高学年 5分
80	ラチとらいおん	ベロニカ・マレーク／文・絵　徳永康元／訳	福音館書店 1965年
	ラチは世界で一番弱虫な男の子。ある朝目を覚ますと、赤いライオンがいた。ライオンはラチが強くなるよう手伝う。ある日、ラチは友達の所へ行くと、いじわるなのっぽにボールをとられてしまったとしょんぼりしている。ラチはのっぽからボールを取り返す。しかし気づくと赤いライオンはいなくなっていた。ライオンは他の弱虫の子のところへ行くと、手紙を残す。		幼児 6分
81	りんごのき	エドアルド・ペチシカ／文 ヘレナ・ズマトリーコバー／絵　内田莉莎子／訳	福音館書店 1972年
	マルチンは雪で一面まっ白の庭に葉のないリンゴの木を見つける。お父さんは木がかじられないように木に金網を巻いてやる。春になるとリンゴの木には花が咲き蜜蜂が群がる。夏にはマルチンが水をやり、実がなり出す。木の葉がたんぽぽ色になる秋、リンゴはすっかり赤くなる。マルチンはリンゴをとり、歌いながら家に持って帰る。		幼児　３歳～ 7分

82	ルラルさんのにわ	いとうひろし／作	ポプラ社 2001年
	ルラルさんは芝生の庭を毎日手入れする。そこに誰か入ろうとするとパチンコで追い払う。ところがある朝、庭にワニが横たわっていた。ワニにすすめられるままにルラルさんも芝生に寝そべるととても気持ちいいことに気づく。そしてルラルさん自慢の庭には、今ではたくさんの動物が寝そべっている。		幼児　3歳～ 2分
83	ロバのシルベスターとまほうの小石	ウィリアム・スタイグ／作　瀬田貞二／訳	評論社 1975年
	ロバのシルベスターは、願いが叶う赤い小石を拾う。ところが、こわいライオンに出くわし「岩になりたい！」と願ってしまう。両親は息子を探し回るが見つからない。ある日、両親は出かけた先で、シルベスターの岩に座る。お父さんが赤い小石を見つけ岩にのせると、シルベスターは願いどおり元の姿に。		中学年 12分
84	わゴムはどのくらいのびるかしら？	マイク・サーラー／文　ジェリー・ジョイナー／絵 岸田衿子／訳	ほるぷ出版 1976年
	ぼうやは輪ゴムがどのくらいのびるか確かめることにした。ベッドのわくに輪ゴムをひっかけ、部屋の外へ。自転車に乗り、バスに乗り、汽車や飛行機、そしてロケットに乗り、とうとう月に到着。歩き出そうとしたとたん、ボーンとはねて、ベッドに着陸。		幼児 3分
85	わたしとあそんで	マリー・ホール・エッツ／文・絵　与田準一／訳	福音館書店 1968年
	わたしは原っぱへ遊びに行く。バッタやカエル、りすやうさぎなどを見つけ「あそびましょ」とかけよると、みんな逃げて行ってしまう。しかし池のそばの石に静かに腰掛けていると、動物たちはわたしのそばへ戻ってくる。そして鹿の赤ちゃんは私のほっぺをなめた。わたしはみんなが遊んでくれて、とっても嬉しくなる。		幼児 4分
86	わたしのワンピース	西巻茅子／文・絵	こぐま社 1969年
	空からふわふわ落ちてきた白いきれで、うさぎはワンピースをつくる。最初は真っ白だったワンピース。うさぎが歩いていくと模様がどんどん変わっていく。水玉、くさのみ、ことりのもよう…朝起きると、ワンピースは星の模様になっている。私の素敵なワンピース。		幼児 3分

＜参考図書＞

子どもたちへ読み聞かせをするうえで、大切にしたいことを教えてくれる本です。
本を選ぶことや、読み聞かせ活動について悩んだとき、私たちにやさしく助言を与えてくれます。

	タイトル	著者	出版社
1	現在（いま）、子どもたちが求めているもの	齋藤惇夫／著	キッズメイト
2	石井桃子集５　（新編子どもの図書館　収録）	石井桃子／著	岩波書店
3	えほんのせかい　こどものせかい	松岡享子／著	日本エディタースクール出版部（文芸春秋より文春文庫版も有り）
4	絵本のよろこび	松居　直／著	ＮＨＫ出版
5	絵本はともだち	中村柾子／著	福音館書店
6	絵本論	瀬田貞二／著	福音館書店
7	幼い子の文学	瀬田貞二／著	中公新書
8	センス・オブ・ワンダー	レイチェル・カーソン／著	新潮社
9	読む力は生きる力	脇明子／著	岩波書店
10	ことばの贈りもの	松岡享子／著	東京子ども図書館
11	昔話が語る子どもの姿	小澤俊夫／著	古今社
12	松居直のすすめる５０の絵本	松居　直／著	教文館
13	読み聞かせわくわくハンドブック	代田知子／著	一声社
14	改訂新版　私たちの選んだ子どもの本	東京子ども図書館／編	東京子ども図書館
15	子どもの本のリスト 「こどもとしょかん」新刊あんない １９９０～２００１セレクション	東京子ども図書館／編	東京子ども図書館
16	キラキラ読書クラブ 子どもの本７０２冊ガイド　改訂新版	キラキラ読書クラブ／編	玉川大学出版部

絵本は、深く感じ、深く思い、深く考える場と機会を、子どもの生活のなかにつくりだすものとして、意義があります。決して知識を詰め込んだり、文字を教えたり、独りで本が読める訓練をしたりする「教材」ではありません。
科学の絵本でもその点は同じです。

子どもにとって絵本が楽しみであり、喜びであってはじめて、子どもはその絵本の世界に魅かれ、共感します。そのとき、深く感じたり、深く思ったり、そして深く考えたりする力が働きはじめます。感動する心を育てる手がかりをつかむのです。

大人が共感したり、感動したりしている絵本を子どもに読んでやりますと、聞き手の子どもは不思議とその絵本に強い関心をもちます。おそらく読み手の気持ちが言葉を通して伝わって、子どもの心をゆさぶるからでしょう。
大人が無理に自分の思いを押しつけようとすると、かえって子どもは心を閉ざします。自然に感動が伝わるときのみ、子どもは大きく心を開いて、語り手の感動を受けとめます。

松居　直／著　「絵本の現在　子どもの未来」日本エディタースクール出版部 より

＊協力ボランティアの紹介＊
茅ヶ崎図書館・子どもの本の会

平成13年度の「読み聞かせ講習会」の講師、スタッフが集まり、子どもたちに読書のよろこびを届けたいと願って会を結成。図書館、小学校、学童保育等で読み聞かせ活動を行っています。また、小学生・中学生・高校生むけに、おすすめの本を紹介する「よんでネット」を季節ごとに発行し、図書館のおはなし室でおはなし会も行っています。

おすすめ絵本リスト　～集団への読み聞かせ～

平成23年（2011年）4月1日　発行
令和元年（2019年）7月1日　改訂
茅ヶ崎図書館・子どもの本の会／協力
茅ヶ崎市立図書館／編集・発行

〒253－0053
神奈川県茅ヶ崎市東海岸北一丁目4番55号
電話　0467－87－1001
FAX　0467－85－8275